

慶應戊辰十田原戰後

373

279



始





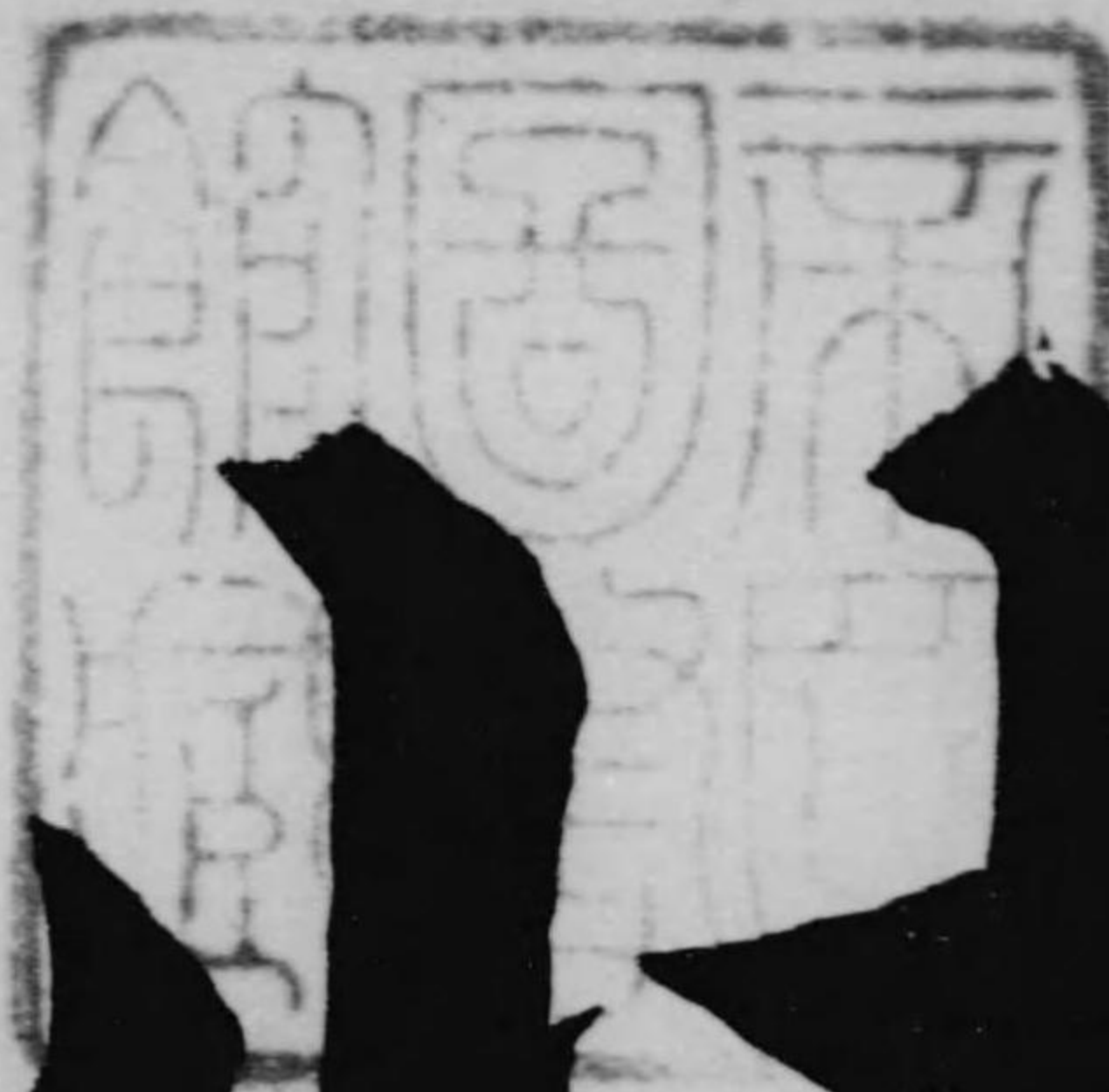




慶應戊辰小田原戰役史



373-279



壯烈

忠三台

大正  
8. 3. 17  
内交







大久保忠禮公御肖像







大久保一忠公御肖像



大久保良忠公御肖像



欠



遊擊隊長昌林之助肖像



# 欠

## 序言

一慶應戊辰函嶺山崎等ノ戰役陣歿者ノ爲メニ其五十年祭ヲ行フヤ  
之ガ記念トシテ當時ノ戰史ヲ編スルコトニ決シ其材料ヲ山田克  
敬氏ニ其編纂ヲ河合安貞氏ト余トニ委託セラレタリ不幸ニシテ  
河合氏ハ二豎ニ犯サレ未ダ筆ヲ執ラザルニ歿シ余一人ノ責ニ歸  
セリ爾來山田氏ハ東奔西走材料ノ蒐集ニ勉メテ以テ余ニ提供セ  
ラレタリ余ハ一々之ヲ檢閲シ其同異ヲ辨ジ其要ヲ摘録シテ以テ  
本書ヲ編成セリ然レモ尙其事實ノ不明ナルモノ尠ナカラズ識者  
高教ヲ惜ムナクンバ多幸ナリ

一初余ハ材料ノ蒐集ヲ待テ稍大ナル冊子ヲ得ンコトヲ期セシガ種  
々事情ノ許サザル者アリテ此小冊子ニ縮少セリ覽者ノ諒察セラ  
レンコトヲ望ム



一本書ヲ編スルニ當リテ關重忠、神原富文、加藤定通、岩田尙恒  
四君ノ閱覽ヲ經テ益ヲ得ル所尠ナカラズ是深ク感謝スル所ナリ  
編者誌

# 慶應戊辰小田原戰役史

## 目録

一、緒論……………	一
二、函嶺山崎戰爭……………	三
三、遺書碑文等……………	一七
四、諸家聞取書……………	二七
五、戊辰殉難者五十年祭狀況……………	五二
六、戊辰殉難者姓名……………	六六



# 慶應戊辰小田原戰役史

村岡尙功編

## 一緒論

戊辰戰役順逆ノ辨、今日ニアリテハ固ヨリ嘸々スルコトヲ要セズ、  
 勤王諸藩ノ國家ニ大造アルハ、固ヨリ論ナク、其稱シテ賊ト名ツ  
 クル者、亦固ヨリ不逞ノ徒ニアラズ、忠愛ノ念ハ、曾テ其懷ヲ去  
 ラズ、挺身事ニ從ヒシモ、不幸其見ル所ヲ異ニシ、其以テ忠ト爲  
 シ義ト爲ス所ノモノ、適マ名分ヲ誤リ、大義ニ負キ、空シク憾ヲ  
 飲ンデ、賊名ヲ負フニ至ル、今ヨリシテ其心事ヲ察スレバ、洵ニ  
 憫ムニ堪ヘザルモノアルナリ。

尙武國ヲ成スハ、古來ヨリノ俗、試ニ我國ノ戰史ヲ緝ケバ、何レ





ノ世カ、忠肝義膽ノ躍如トシテ、前ニ横ハルモノアルヲ感ゼザラ  
ンヤ、我函嶺山崎ノ戦役ノ如キ、固ヨリ戊辰戦史ノ一小部分ニ過  
ギズト雖モ、忠諫命ヲ顧ミザルノ傑士アリ、罪ヲ一身ニ負フテ、  
決然自裁スルノ烈士アリ、進ンデ敵將ヲ斫リ、身亦斃ル、ノ勇士  
アリ、退ヒテ善後ヲ策スルノ良士アリ、千波萬波、當時ヲ回顧ス  
レバ、轉タ人ヲシテ慨然タラシムルモノ、尠シトセザルナリ。

嗚呼堂々タル提封拾壹萬參千石、此戦役ニ由リテ、減シテ七萬五  
千石トナル、當時事ニ與ルモノ、得失、復讐スベキモノナキニア  
ラズト雖モ、豈亦天ニアラズヤ、烏兔匆匆五十年、今ヤ賊名ヲ負  
ヒシモノ、後ニシテ、功勳ノ録セラル、モノアリ、野ニアリテ實  
業ニ従事シ、國利ニ勉ムルモノアリ、昔日ノ官賊、今ハ則チ恩怨  
相忘レテ、舉國一致ノ大勢ニ歸向ス、日東國運ノ隆昌、世界ノ耳

目ヲ聳動スル所以ノモノ、當世人士ノ功ニ由ルト雖モ、抑亦曩時  
ノ相衝突シ、相搏撃スルノ間ニ、醞釀陶冶セシモノアルニ由ラズ  
ンバアラズ、果シテ然ラバ則チ先キノ賊名ヲ負ヒシモノ、云爲モ、  
亦現時ノ文明ノ源由ニ對シ、其一部ヲ占有スルノ權アル可ク、泉  
下ノ英靈モ、現時ノ國勢ニ顧ミテ、亦應ニ地下ニ瞑目スベキナリ。  
曩日、有志相謀リテ、官賊合祀ノ五十年祭ヲ行フヤ、忽チ地方ノ  
大賛成ヲ得、乃チ小峰公園ヲトシテ、其祭場ニ充テ、盛大ナル式  
典ヲ舉グ、會スル者幾百千人、陸海軍將卒、貴顯紳士、學校生徒、  
有志人民等、有ユル階級ヲ網羅セリ、乃チ此時期ヲ機トシ、聊カ  
戦役當時ノ狀況ヲ記シ、以テ祭典ノ記念ニ充テントス。

## 二 函嶺山崎戦争

我小田原藩主大久保忠禮公ハ、讃岐高松家ヨリ入テ、忠愨公ノ後



ヲ承ケ、藩祖忠世公ヨリ實ニ十二世ノ主ナリ、高松家ハ、常陸水戸藩主頼房ヨリ出ヅ、頼房ハ則チ徳川家康ノ第十一子、彼ノ有名ナル水戸烈公ハ、公ノ叔父ニシテ、徳川慶喜公ト公トハ、從兄弟ノ間ニアリ、烈公ノ勤王ニ厚キハ、普ク世ノ知ル所、公亦夙ニ勤王ノ志深ク、是ト同時ニ、亦徳川氏ニ奉ズルノ念甚ダ厚シ、加フルニ、我大久保家ハ、三河以來、歴世徳川氏ニ臣事シ、譜代列藩ノ一トシテ、小田原ノ要衝ニ封ゼラレ、幕府ノ眷顧固ヨリ薄カラズ、藩士ノ徳川氏ヲ懷フノ念、甚ダ淺カラズ、徳川氏三百年ノ御恩トハ、藩士ノ口ヲ斷タザル所ナリ、是ヲ以テ勤王ノ念慮アルト與ニ、又幕府ヲ佐クルノ志ニ滿チ、若シ當時ノ勤王論ニ、討幕勤王佐幕勤王ノ二者アリトセバ、我小田原藩ハ、正ニ後者ニ屬スベキモノトス、故ヲ以テ藩論動モスレバ則チ佐幕ニ偏スルノ傾向アリ、

リ、惟世ノ大勢ト、二三識者ノ意見トニ依リテ、僅カニ干戈ヲ動カサ、リシノミ、偶林昌之助ノ來リテ盟主タランコトヲ請フヤ、當時其請ヲ容レズト雖モ、然モ慰諭款待シテ之ヲ歸ヘシ、其再ビ函嶺ニ逼マルニ及ンデ、始メテ之ト砲火ヲ交ヘシナリ。

林昌之助名ハ忠崇、上總國望陀郡ウツノヂ請西藩主ニシテ、食封壹萬石、夙ニ佐幕ノ志ヲ抱ク、適江戸脱走ノ遊撃隊三十餘人、同國木更津ニ着岸シ、其隊長伊庭八郎人見勝太郎ノ二人、來リテ徳川家恢復ノ事ヲ説ク、由テ深ク相結託シ、約シテ曰ク、今此地ニ在リテ敵ヲ受ケンヨリハ、寧ロ進ンデ速カニ房總ノ諸侯ヲ連和シ、其兵ヲ假リテ豆相ニ航シ、小田原及葦山ノ力ヲ借リテ、大ニ兵威ヲ張リ、行ク々東海道ノ諸侯ヲ説キ、從フ者ハ共ニ力ヲ合セ、拒ム者ハ之ヲ伐チ、紀尾彦ノ三藩ニ報復セバ、徳川氏ノ恢復復難キニアラザ



ルナリト、蓋三藩ハ、徳川氏ノ親藩若クハ重臣ニシテ、夙ク勤王ニ趨キ、徳川氏ノ恢復ニ勉メザルヲ恨メルナリ。

是ニ於テ藩兵七十人、遊撃隊三十六人ヲ合セテ一隊トナシ、軍令ヲ定メテ請西ノ營ヲ發ス、時ニ慶應四戊辰年四月三日ナリ、行ク行ク各藩ヲ説キ其兵ヲ假リテ、同月十日房州館山港ヨリ、伊豆ヲ指シテ出帆ス、航中強雨ニ遭ヒ、水深クシテ碇ヲ降ス可能ハズ、空シク洋中ニ飄飄シ、十二日始メテ相州眞鶴港ニ着ス、直チニ上陸シテ、昌之助ハ、部下四人ヲ從ヘ、小田原ニ至リ、老臣渡邊了叟加藤直衛二氏ト、藩ノ巨室杉浦氏ノ邸ニ會シテ、小田原侯ノ義兵ニ盟主タランコトヲ請フ、然レモ議敢テ決セズ、遂ニ去リテ隊兵ヲ率ヒ、熱海ヲ經テ、葦山ニ至リ、三島ニ出テ、佐野ヲ過ギテ、御殿場ニ達ス、同十九日御殿場ヲ發シ、黒駒驛ニ至リ、將ニ甲府

ニ入ラントス、適マ沼津藩士ノ兩三名、來リテ議スル所アリ、遂ニ其議ニ從ヒ、方向ヲ轉ジテ、沼津在香貫村靈山寺ニ滯陣ス、沼津藩懇遇具サニ至ル、此間駿府勤番蔭山頼母、三十餘人ヲ率ヒテ來リ會シ、又岡崎藩和多田貢、脱藩二十餘人ヲ率ヒテ同盟ニ加ハレリ。

滯陣數日、何ノ爲ス所ナク、曠日彌久、少壯氣銳ノ戰士ノ能ク堪フル所ニアラズ、五月十九日第一軍隊長人見勝太郎、先ヅ已ガ隊兵十五人ヲ率ヒテ、香貫村ヲ出發シ、木瀬河ノ洪水ヲ亂リテ、函嶺ニ進襲スルヤ、惣軍直チニ出發シテ、之ニ追蹤ス、第二軍伊庭八郎十三人、前田條三郎十六人、駿府勤番蔭山頼母三十七人、第三軍岡崎脱藩和多田貢二十三人、第四軍請西藩六十一人、第五軍館山脱藩十四人、飯野脱藩十九人、并參軍軍目輜重共ニ二十五人



外ニ勝山脱藩三十一人、前橋脱藩二十三人ヲ合セ、通計二百七十五人ナリ。

遊撃隊既ニ沼津藩ノ保護ヲ脱シ、箱根ニ來リ逼マル、我小田原藩家老格吉野直興、年寄役早川茂右衛門ヲシテ、一隊ノ兵ヲ率ヒテ之ヲ防ガシム、之ヨリ先キ、因州鳥取藩士中井範五郎、日向佐土原藩士三雲爲一郎、豆相軍監トシテ小田原ニ出張シ、中井氏箱根ニ至リ其軍ヲ監ス、斯クテ兩軍關門ヲ隔テ相銃撃シ、勝敗未ダ決セズ、戰稍ク方ニ酣ナラントス、此時ニ當リテ城中異論ノ起ルアリ、蓋遊撃隊ノ行動ヲ以テ義舉ナリトナシ、之ト相和シテ以テ官軍ニ當ラントス、其說大ニ勢ヲ得テ、終ニ藩論ヲ動カシ、用人關小左衛門箱根ニ至リテ命ヲ傳へ、黒柳仁十郎敵營ニ至リテ和議ヲ決ス、時ニ五月二十一日ナリ、此役藩士ノ負傷セシモノ十餘人ナ

リ。

遊撃隊既ニ我藩ト和シ、進ンデ關内ニ入り、軍監中井範五郎ヲ權現坂ニ斬リ、終ニ小田原ニ入ル、之ヨリ先キ、軍監三雲爲一郎小田原ニアリ、此人寡黙沈厚、藩之ヲ害スルニ意ナシ、乃チ蜂屋重太夫ヲシテ藩議ヲ傳へ、酒匂川汎濫渡ルベカラザルヲ以テ、舟ヲ釐シ海路ヨリ遁走セシム、此時官軍ノ害ニ遭フ者ハ、佐土原藩御牧重太郎、大村藩山田慎太郎、荻野藩小野木守三、松下藩片山清五郎、吉田萬藏、横田長三、其他尙ホ數人アリ。

此日一人アリ、僕ヲ從へ城西板橋見附ニ至ル、番士山田龍兵衛、小泉彦藏之ニ接ス、彼我應答ノ際、突然山田ノ刀柄ヲ握ル、山田之ヲ拂ヒテ、刀ヲ抜キ一閃之ヲ斬ル、小泉相助ケテ之ヲ殺ス、之ヲ其僕ニ問フ、僕曰ク、是レ我主土州藩士吉井顯藏ナリ、箱根新



屋ノ旅舎ヨリ逸シ來ルト。

佐幕論既ニ勝ヲ制シ、遊撃隊既ニ城下ニ入り、軍監既ニ斬殺セラレ、或ハ退避セシメラレ、之ヨリシテ我藩將ニ佐幕ノ各藩ト相呼應シテ、大ニ勢容ヲ張ラントス、今ヨリシテ之ヲ顧ミレバ、危機一髮、眞ニ人ヲシテ悚然タラシムルモノアリ、此時ニ當リテ能ク一藩ノ論議ヲ翻シ、勤王ノ大義ニ歸セシメシモノヲ、中垣謙齋トス、謙齋性謹嚴、學問該博、忠孝ノ心最深シ、適マ事ヲ以テ江戸ニアリ、藩脱走ノ徒ト相和シ、王師ニ抗スト聞キ、驚愕措ク所ヲ知ラズ、倉皇歸リテ藩主ニ謁シ、其不可ヲ極諫ス、時ニ城中佐幕ノ議論最盛ニシテ、國老渡邊了叟、用人關小左衛門等、固ク取テ動カズ、終ニ君前ニ於テ大ニ論争ス、而シテ了叟ハ國老、權力最強ク、謙齋ノ議動モスレバ壓倒セラレントス、小左衛門等亦謙齋

ノ敢然屈セザルヲ見テ、刀ヲ按シテ之ニ迫ル、諸士ノ其間ニ入ルアリテ、纒カニ止ムヲ得タリ、而シテ謙齋正議侃々、議論益熾ンナリ、藩主忠禮公大ニ悟ル所アリ、急ニ早川茂右衛門ヲ招キ、家老格ヲ與ヘテ事ヲ議セシム、早川固ヨリ謙齋ノ議ニ左袒スル者、此ニ於テ謙齋ノ議、遂ニ藩論ヲ翻シ、歸順ノ事此ニ決セリ。

是ヨリ先キ、小田原藩脱徒ト相與スルノ報傳ハルヤ、朝廷直チニ問罪使トシテ、穗波三位ヲ派遣セラレ、因州藩士河田佐久馬參謀タリ、三雲爲一郎軍監トシテ再ヒ來ル、因州長州備州伊州(藤堂)四藩ノ兵、相結束シテ來リ、將ニ酒匂ト飯泉トノ二方面ヨリ進ンデ、直チニ小田原ヲ衝カントス、而シテ藩論ハ此時既ニ歸順ニ決セルヲ以テ、忠禮公ハ城ヲ出デ、菩提寺本源寺ニ屏居シ、夫人ハ、久野村總世寺ニ入りテ、謹慎ヲ表シ、遊撃隊ニ諭シテ、小田



原ヲ去ラシメ、以テ官軍ヲ城中ニ迎フ、實ニ五月二十六日ナリ。官軍我小田原藩ノ既ニ歸順セルヲ以テ、爰ニ其進撃ヲ止メ、直チニ賊徒ヲ討滅シテ、以テ謝罪ノ實効ヲ舉グ可キヲ命ズ、嗚呼昨ハ一タビ相和シ、今又再ビ之ト鬪ハザルヲ得ズ、翻雲覆雨人事ノ慘ヲ極ム、然レモ已ニ此令ヲ拜ス、復躊躇スベカラズ、此時ニ當リテ、遊撃隊ハ、既ニ小田原ヲ去テ、湯本村山崎ニアリ、藩兵直チニ進ンデ之ヲ討ツ、而シテ官軍之ニ繼グ、脱兵丘陵ニ炮壘ヲ築キ下瞰シテ我ヲ射ル、而シテ藩兵海道ノ正面ヨリ進ミ、何等ノ掩蓋ナク、仰テ以テ敵ヲ銃撃ス、前ニハ衷情斃スニ忍ビザルノ敵ヲ控ヘ、後ニハ四藩ノ兵我ヲ監ス、而シテ身ハ田畦ノ間ニ暴露シテ、惡闘苦戦ヲ極ム、而レモ主家ノ存亡ハ、此一舉ニアリ、况ンヤ大義名分ノ拘ハル所、豈何ゾ他ヲ顧ミルノ暇アラシヤ、石川連治先

ヅ進ンデ死シ、高橋藤太郎深く敵陣ニ入りテ、敵將伊庭八郎ノ左腕ヲ斷チ、身亦敵彈ニ斃ル、小川小右衛門、片切左仲、鈴木久太郎等、皆突進肉薄シテ死ス、小野豹二郎、久下佐兵衛、横井春江等亦此役ニ殉ジ、渡邊了叟、吉野直興、松下舍人、奥平兵庫、飯野數衛、片桐久太郎、岡島峰衛、山下江並、里見久米之丞、大西藤二郎、坂部彌一郎、河合鍵三郎、小早川丹造、大木錠次郎、村山徳三郎、入江安次郎等、前後相傷ク者四十人、時薄暮ニ及ブ、急撃突進、劍銃相搏ツ、脱兵遂ニ支フル能ハズ、潰敗シテ一ハ温泉路ヲ逃レ、一ハ東海道ヲ走リ、又或ハ道ヲ失シテ生擒セラレ、若クハ斬殺セラル、其海道ヲ走ル者ハ、湯本臺ノ茶屋ノ民家ヲ燒キテ、其追躡ヲ阻止セリ。

此日別ニ一隊ヲシテ、石垣山ヨリ進ンデ、脱兵ノ側面ヲ撃タシム



脱兵亦一隊ヲ派シ、畠ノ平ニ於テ相會シテ血戰シ、高井林平、齋藤太兵衛等之ニ死ス。

翌二十七日藩兵二手ニ分レ、其温泉路ヲ追フ者ハ、堂ヶ島ニ於テ脱兵九人ヲ斬リ、其東海道ヲ進ムモノハ、箱根日金嶺ニ於テ二人ヲ斃シ、山中ニ於テ六人ヲ斬ル、是ヨリ先キ脱兵殘兵ヲ率ヒテ、箱根新屋宿ヲ燒キ、日金山ヲ越ヘ、伊豆網代ニ赴キ、海ニ航シテ安房館山ニ奔ル、始メ遊撃隊ノ兵二百七十餘人、後來リ投スル者アリ、一時五百人ノ多キニ至リシガ、其房州ニ遁ル、ニ及デハ、或ハ死傷シ、或ハ遁走シテ、餘ス所ノ兵、百四十人ナリト云フ。此役長州藩士松岡梅太郎、挺身シテ敵ニ當リ、飛丸其背脇ヲ貫ク棧ニ横濱大病院ニ至リテ死ス、藩士ノ奮進突撃セシモノ、同氏ノ激勵亦與リテカアリシト云フ。

是ニ於テ戰乱全ク平定シテ、小田原靜穩ニ復シ、五月晦日問罪ノ師咸ナ江戸ニ還ル、獨リ因州藩兵小田原城ニ止リテ守備シ、後藤堂藩唐津藩等相交代シテ守備ス、而シテ藩貯藏ノ銃炮彈藥、皆沒收シテ漁船ニ搭載シ、江戸ニ回送セラル、當時此光景ヲ目睹スルモノ、皆痛憤悲嘆セザルハナカリキ、

六月五日小田原藩家老渡邊了叟、吉野直興、早川茂右衛門、關小左衛門等、糾問ノ爲メ江戸ニ檻致セラル、後渡邊了叟ハ、藩ノ處置ニ任セラレ、吉野早川關三氏ハ、赦免セラル、又小泉彦三、山田龍兵衛ノ二氏ハ、官軍吉井顯藏ヲ斬殺スルノ故ヲ以テ、鈴ヶ森ニ於テ斬ニ處セラル。

家老岩瀬大江進ハ、是ヨリ先キ自ラ責ヲ引テ自殺セリ  
朝廷既ニ渡邊了叟等ヲ藩ニ送り、藩ヲシテ之ヲ處分セシム、彼及



ビ岩瀬ハ、今回ノ責任者ナリ、岩瀬先ヅ責ヲ引ク、渡邊ノ死亦免ル可ラズ、藩此ニ於テ割腹ヲ命ズ、渡邊亦豫シメ此事アルヲ期ス死ニ臨ンデ神色自若、徐ロニ一曲ヲ舞フ、音吐朗々、姿態動靜、毫モ平日ニ異ナラズ、一座能ク仰ギ見ル者ナシ、志摩宗之助之ヲ介錯スト云フ、(志摩ハ平素渡邊ノ眷遇ヲ得タル者ニシテ、其介錯ハ、渡邊ノ冀望ニ出テタルガ如シ、渡邊死後其忌日ゴトニ、終日事ヲ取ラズ、酒肴ヲ携ヘテ渡邊邸ニ至リ、當時ヲ回想シテ、痛飲時ヲ移ス者數年、一日之ガ爲ニ病ヲ發シ、後終ニ起タザルニ至ル) 明治元戊辰年九月二十七日、藩主忠禮公永蟄居申付ラレ、削封七萬五千石トナル、同十月二日忠良公家督相續仰付ラル、公ハ萩野藩主大久保中務少輔ノ嫡男ナリ、萩野藩ノ始祖ヲ教寛ト曰フ、本藩主忠増公ノ弟ニシテ、分知六千石、後若年寄トナリ、一萬三千

石ヲ領シ、以テ少輔ノ代ニ至ル、公後故アツテ致仕シ、明治十年西南ノ役、陸軍伍長ヲ以テ出征シテ、肥後田原坂ニ戦死セラル、墓ハ、同國木葉驛官軍墓地ニ在リ。 明治二年九月三日忠禮公幽閉ヲ免ゼラレ、忠良公ノ致仕セラル、ニ及ンデ、再ビ家ヲ繼ギ、嗣子忠一公其後ヲ承ケ、以テ現忠言公ニ至ル。

三 遺書碑文等

家老岩瀬大江進遺書及ヒ川島氏上申書

口上之覺

一 今十日曉、主人大江進、側近呼寄、申聞候者、此度御上之御一 大事ト相成候次第ハ、全我等始、不行届ヨリ相生シ候儀ニ付、 何共申譯無之、切腹及候間、介錯可致旨、申付候間、至極尤ノ



儀ニ付、傍ニ相扣居、無滯割腹仕候間、直様介錯仕候、此段御尋  
ニ付、申上候以上

岩瀬大江進召仕

六月十日

川島專右衛門印

板倉理右衛門様

磯田三郎兵衛様

大久保梅干介様

奉遺願候一札

私儀、從來暗劣不肖ノ性質ニ御座候處、家筋之儀モ有之故歟、段々重役ヲモ被仰付候ニ付、直様御辭退モ申上兼、不心モ永々相勤候得共、近年病身ニ罷成リ、精神衰耗彌増候ニ付、御家老職御免

被下度、先達而御内意申上候處、此上何レ共致保養、取續キ奉勤仕候様、厚蒙御沙汰候ニ付テハ、無是非出勤仕居候處、不圖モ當閏四月、林昌之助以下之脱走人、從總州致渡來候一件有之、早速ニ追捕ノ建議可致候處、其邊ニ心附モ無之、彼是御不都合ノ取扱モ有之、其砌從

官府、御責言ヲモ被爲蒙候得共、格別御寛宥之御沙汰被仰出候處程モ無之、去月二十日ノ事件到來、同職渡邊了叟儀、專取扱候事トハ乍申、金穀ノ儀ハ、豫テ御勝手方頭取ヲモ被仰付置候ニ付テハ、全ク引受居候事ニハ候得共、脱走人へ金穀等差送候儀、更ニ不相心得、職掌モ不相立、心外至極ノ儀ト奉存候、其頃御家中ノ人心、方向ニ迷ヒ、一途ニ纏難候處ヨリ、心相違之者モ有之儀等段々篤ト致廻慮候得者、私并了叟等、職掌無狀之所致故、御家當



節之御摸樣ニ立至候儀ト、幾重ニモ奉忍入候外無之、然ル所了叟  
其外ニモ、從

御大總督府、蒙御不審、追々御詰問之次第等、何分難忍傍觀、旁  
以爲申譯、決然割腹仕候間、此段委細御軍監へ被仰立度候、今更  
申上候モ奉忍入候得共、殿様御謝罪、萬分之御一端ニモ相成候ハ  
、本懐至極、難有奉存候、微衷之次第、深ク御酌量有之、可然  
様御前へ被仰上、御軍監方へ御達被下度、此段各様迄奉遺願候、  
泣血百拜、頓首々々。

慶應四戊辰年六月十日

岩瀬大江進血判

御家老中

家老岩瀬大江進墓誌銘

中垣謙齋ノ撰ブ所、聞ク當時憚ル所アリテ、急遽一夜ニ此文

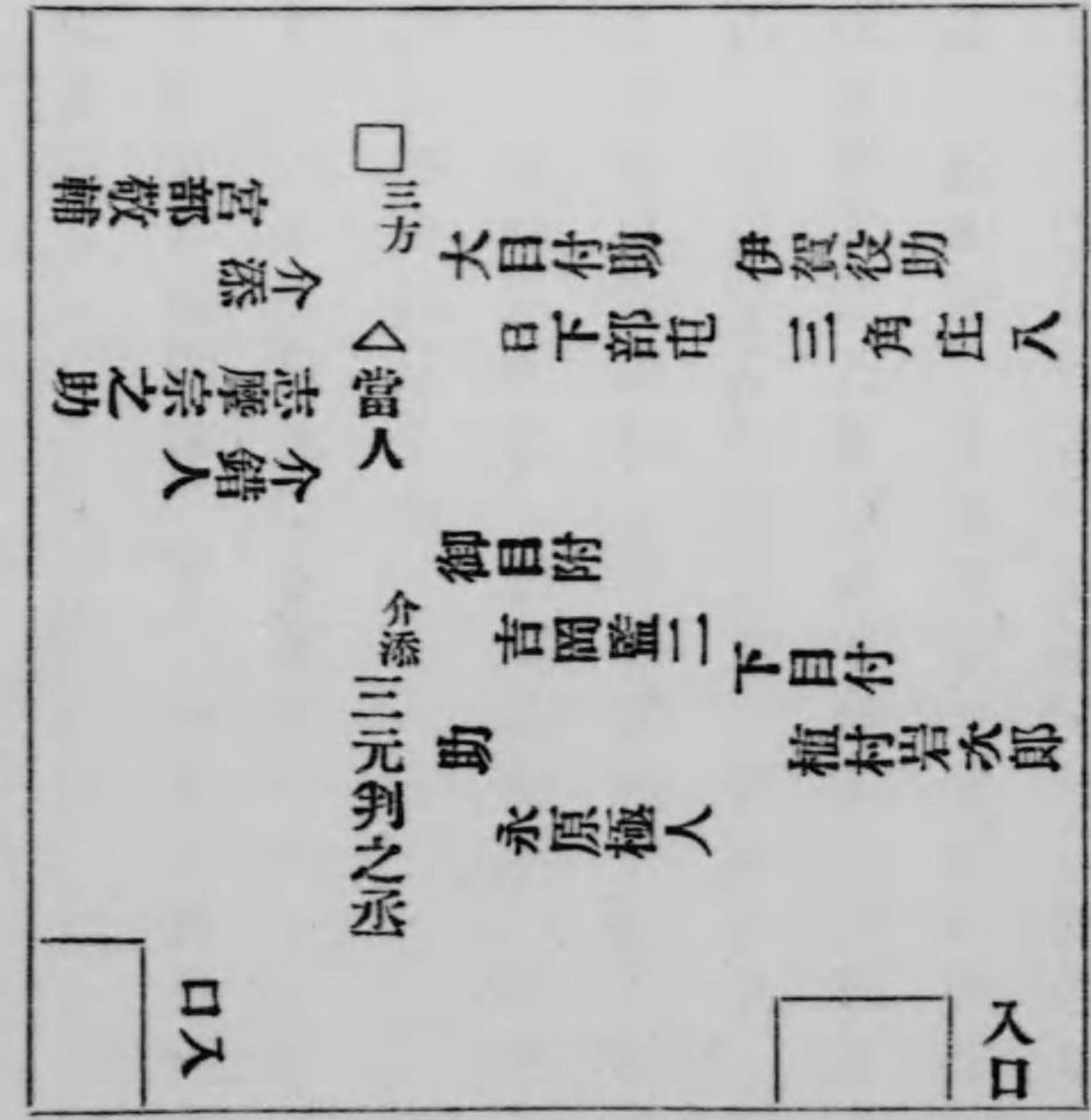
ヲ草シ、岩瀬家庭園ノ砌石ヲ取リテ、之ニ鐫刻セシメ、固ヨ  
リ推敲ヲ加フルノ暇アラズ、後墓ヲ修スルノ際、土中ヨリ之  
ヲ發見セシモノナリト。

君氏岩瀬、諱正敬、通稱大江進、世小田原巨室、考諱正盛、妣蜂  
屋氏、君其第三子也、以文政紀元戊寅九月十五日生、伯正曆嗣家  
而早世、仲某先天、因爲正曆嗣、爲人方面長身、行步遲重、孝友  
勤儉、接物溫和、達兵學善槍法、又有吏幹、爲稽古所奉行、遷年  
寄役、有故免、頃之、進爲執政、兼領度支、蓄軍資鑄大銃、以積  
年之勳賜佩刀、前後四次、其餘賞賚不可勝紀、明治紀元戊辰五月  
元請西候林忠崇及德川氏脫籍士衆三百餘名、稱復幕府舊業、竊據  
函嶺、分隊東下、藩出兵擊之、既而以爲、脫士所爲頗近義舉、遂  
與講和、贈金及米、事聞于東京、督府震怒、速發問罪之師、刻日



向小田原、藩議阻險抗之、會有論者、明順逆辨時勢、卒回其議、  
 遂脫士徹守備、謹迎官師、君首至大磯驛、侃々分疏、弗聽、  
 主公恭畏、負罪避居城東本源寺、官師入城、徵管鑰、封府庫、鞠  
 問和解情狀、捕當事某々、護送東京、闔藩悚惕、君慨然以謂、我  
 爲國老職、且領度支、雖無逮捕、罪不得不分、當一死以補 主家  
 謝罪之萬分也、乃書其梗概、以託家臣川島某、割腹而卒、享年五  
 十有一、實六月十日也、事聞、官吏臨檢之、且收其遺書、令假埋  
 其屍、乃姑葬城東誓願寺、官怒隱然如有稍霽、後至 寬典之命下安  
 堵如故、蓋未必非由君之忠死與有力也、可謂能殺身以衛社稷、不  
 愧大臣之體矣、十二月三日藩命嗣子正美襲家、十二月某日改葬附  
 先塋、法諡曰勇乘院、請誌于墓、正美從余學、誼不可辭、因叙其  
 顛末、餘詳于家乘、故不多及、謙齋中垣秀實誌、

家老渡邊了叟、割腹之節、檢使立台人等、出役左ノ如シ、(明治元  
 年戊辰十月九日夜)



- 警固  
 御先手頭月番支配  
 庵原浦次郎  
 福巳糸次郎  
 後藤榮次郎  
 山村龍太郎



中垣謙齋碑文

小峰公園大久保神社ノ下、右方ニ盤折シテ行クコト數十歩、  
氏ノ碑石アリ、碑文左ノ如シ。

小田原藩文學中垣先生碑

前小田原藩文學中垣先生、既歿之明年、門弟子相謀建碑、奉狀詣  
余廬曰、先師有功於社稷、微先師則我大久保氏之鬼、殆不血食、  
而吾儕小人、亦相率爲不義之徒、墓道之文、請累椽筆、乃取狀讀  
之、參以所曾聞、二三子之言非謚美、余何敢辭、謹按、先生諱秀  
實、字仲成、號謙齋、世籍本藩、曾祖諱秀之、祖諱秀定、考諱秀  
元、妣梅原氏、先生少孤、襲祿百石、歷事彰道侯有道侯及今星嶽  
侯、自世子仲讀遷監察、轉先鋒隊長、爲大監察、丁卯冬大將軍德  
川慶喜、奉還政權、麾下嗷々、異論沸起、明年春與王師戰於伏見

敗績、大總督熾仁親王、東征入江戸城、五月賊將林忠崇、卒三百  
餘人、來侵函嶺、侯遣衆逆擊、賊不抗說以戮力興復幕府、乃與俱  
連和、殺督府所置軍監、而給錢穀焉、親王聞之、發問驛使、遣兵  
來討、我衆欲據嶮拒之、適先生在江戸、聞變馳還、諫侯曰、昔者  
豐公奉詔東伐北條氏、遂致族滅、恃險抗命、殷鑑不遠、且今天子  
親政、將軍解職、忠崇等無所受命、敢弄干戈、非獨王家之罪人、即  
德川氏之罪人矣、侯大悟、即日傳令、迎王師、擊賊走之、嗚呼榮  
狗豕犬、各愛其主、自德川氏執權、二百餘年、士太夫徃々知有幕  
府、不知有天朝、一旦錦旗東指、群犬所怪、當是時、辨順逆察成  
敗、侃々正議、以能決大計於呼吸間如先生者、豈可不謂知時務之  
雋傑乎哉、既而廷議果釋侯罪、使其支封山中侯世子入承先祀、賜  
以舊封三分之二、闔藩士民安堵如故、先生以功陞爲用人、加祿二



百石、併前食三百石、俟又手賜名刀一口、尋任少參事、兼文武督學、居二年告老、猶充一等文教師、不責以職務、餼米五苞、蓋特典也、先生聚橫井氏、子六人、曰秀通、曰玄珉、曰寅三郎、曰安保、曰親侃、曰秀敷、女四人、明治九年丙子六月一日歿、葬於大久寺先塋之次、享年七十有二、先生容貌魁梧、秀眉隆準、長髯如雪、性鯁直不與俗諧、潛精經史、兼能詩文、其在劇職奔走四方、未嘗一日手廢卷、又好誘掖後進、諄々不倦、以故入門受業者數十百人、及歿痛惜追慕、猶幼兒失父母、蓋先生嘉言懿行、不暇枚舉、而余特服其處變得宜、銘曰、

守經不達權者迂也、臨事不能斷者懦也、不迂不懦謂之通儒、嗟乎通儒有先生焉、而今則亡矣、碑三尺兮字數行、骨則朽兮名則芳。

從五位

大久保忠禮題額

一等編修官從五位

川田

剛撰文

太政官大書記官從五位

巖谷

修書

#### 四 諸家談話聞取書

戊辰戰役當時仰德隊士トシテ奮戦セル向井政敬氏ノ談

慶應四戊辰五月十九日夕刻、家中殘ラズ城中ニ召サレテ、列座(家老年寄)大廣間(家老年寄ヲ除キ御目見得以上)ニ詰メタ、此時ハ大分世間ガ騒々シキ爲メ、其相談ノ爲デス、所ガ夜八時頃、遊撃隊中伊庭八郎加藤普彌(本藩士加藤市太夫二男)等來リテ幕府ニ加擔ノ事ヲ説ク、議少シモ決セズ、遂ニ徹宵シ、二十日明ケ方ニナツテ、七ツ頃、愈箱根ニ出陣ノ沙汰ガ出テ、山角町水島ノ前ニ勢揃ヒス、是所謂仰德隊ニシテ、隊長ハ近藤一角、其以下四十



餘人デス。

此時ハ連日豪雨デアツテ、酒匂ノ橋モ落ツル程ノ騒ギデアツタカラ、途中ハ恰モ河ノ中ヲ歩ルク様デ、非常ニ困難シテ、只今ノ時間デ午後一時頃、元箱根ニ着キ、夫レヨリ寨ノ河原ニ進ム、此邊ノ一帯ハ、土地ノ低キ爲メ、恰モ湖水ノ様デシタ。

此時命令ガアリ、寨ノ河原ヲ守護セヨトノ事デアツタ、陣立ハ大砲二門、何レモ四斤砲デ、各自ニ小銃ヲ持ツテ居リマシタ、多刻七ツ頃ニ大砲ノ音が聞エタ、之レハ遊撃隊ヨリ發砲シタモノデス、此時ノ話ヲ聞クニ、其當時既ニ遊撃隊ト、内々妥協ガ出來テ、互ニ空砲ヲ放ツテ、別レヨウト云フ事デアツタト云フ、所ガ又小田原ニ官軍方ガ入り込ンデ、頻リニ遊撃隊ヲ討伐セヨト、強要シテ來タノデ、餘義ナク實彈ヲ送ツテ、戰ヲ開ヒタ、遊撃隊モ爲ニ之

レニ應戰シタノダト云ヒマス。

夕刻、箱根關所詰ト交代シマシタガ、盛ニ大砲小銃ヲ打タレルノデ、急速關門ヲ鎖シタガ、敵ハ關門ノ傍ニアツテ發砲シ、金井左富内田秋助等ノ諸士ガ負傷シマシタ、夜六ツ時頃、又々仰徳隊ニ向ツテ、松下藩（官軍）ヲ打テトノ命令ガアリ、廿一日頃ニナツテ、中井範五郎以下十數人ヲ殺シ、小田原ニ引上ゲタ、之レガ箱根ノ戰爭デス。

廿六日官軍問罪使ヲ發シテ來リ逼マル、藩主忠禮公ハ、謹慎セラレテ本源寺ニ入り、遊撃隊ヲ打テトノ命令アリ、皆山崎ニ向フ。此時ノ陣立ハ、大砲方二隊ニ別レ、一方ハ早川方面ニ據リ、一方ハ入生田方面ニ據ル、早川方面ハ、加藤丈之助以下、入生田方面ハ仰徳隊之ニ當ル、本隊ハ街道筋ヲ進ム豫定デアツタガ、敵ハ湯



塙道ニ據リ、地ノ利ヲ占メテ居ルノデ、各其部署ニ就ク事が出来ズ、止ムヲ得ズ、田ノ畦ヤ何カニ據ツテ、應戦シマシタ。

官軍方小田原藩ノ不利ト見ルヤ、長、因、津、ノ混合兵、盛ニ應援シテ戦フ、松岡梅太郎氏等ハ、此時ノ急先鋒デシタ、遊撃隊ハ漸時退却シ、伊庭八郎坂田某等殿リトナツテ戦フ、我藩ノ高橋藤太郎、挺身シテ伊庭ニ迫リ、其左腕ヲ斬ル、坂田直チニ高橋ヲ銃殺ス、此戦デ鈴木久太郎外數氏戦死シ、官軍方デハ、松岡梅太郎、我ガ藩士保田收藏ノ發シタル銃丸ニ當リテ倒ル、我藩吉野直興氏之ヲ見テ保田ニ割腹ヲ迫ツタガ、恰モ其時ニ長藩ノ某氏が來テ、斯カル例ハ、戰場ノ習ヒ、其儀ニ及バザルベシト云フ事デアツタ、之レガ山崎ノ戦デス。

私運仰徳隊ハ、廿六日湯本三枚橋ニ泊リ、廿七日箱根ニ向フ、遊

撃隊追撃ノ爲デス、瀧坂ヲ上リ、蘆ノ湯カラ二子ニ上リ、山中ニ一泊シテ、湯場道ニト出マシタ、途中級ノ中ニ小野豹治ノ死骸ガアリマシタ、廿八日湯場道ヲ下リツ、奈良屋ニ泊ル、明ク方十餘人ノ異様ノモノヲ見、大平臺方面ト宮ノ下方面トヨリ、相別レテ之ヲ追フ。

先キニ見タ十餘人、堂ヶ島近江屋ニ潜伏ス、之レヲ誰何スレバ、果シテ遊撃隊ノ残兵テアル、依ツテ武装ヲ解カソウトシタガ、敵對ノ模様が見エタノデ、悉ク之ヲ銃殺シマシタ、前田條三郎外數氏ガソレデス。

#### 神原富文氏談話

慶應三卯年十二月、初メ江戸勤番ヲ命ゼラレ、金井左富松波植田等ノ諸氏ト共ニ江戸ニ下ル、當時ノ江戸ノ騒擾ハ、殆ンド想像ノ



外ニアリ、日没スレバ行人絶エ、商家ハ門ヲ堅ク閉シテ、營業スルモノナク、毎夜ノ如クニ辻斬アリ、又失火ハ一夜ニ四五度ニ及ブ、就中薩摩ノ青年組ハ、諸侯富豪ノ家ニ押シ入り、屋敷ヲ毀チ金子ヲ奪フ等、實ニ人心恟々タリ。

我藩ニテモ、若シ暴徒來襲セバ、如何ニスベキカト云フガ、實ニ大問題タリシカ、余ノ發議ニヨリ、玄關ニ四斤砲ヲ据エ置カレタリ。

歲將ニ暮レントスル時、殿様甲府城代ヲ仰セ付ケラレ、余等諸方ニ使者ニ立チタル事アリ、二十五日ニ至リ、小田原へ歸國仰セ付ケラレ、早朝芝ヲ立チ出デ、大森マテ來カ、リタル節、後方ニ砲聲ヲ聞キタリ、之レ薩摩ノ屋敷ヲ打チ拂ヒシナリト、而ルニ其脱出者中江戸ヲ立チ退キ、荻野山中藩ヲ燒キ、所在ニ火ヲ放チ、財

ヲ奪ヒテ、十日市場（秦野）方面ニ向フモノアリ、余ハ二十六日歸城間モナク、其夜是等ノ暴徒ヲ討ツベク、大約三十人許ニテ十日市場ニ向フ、此時ノ隊長ヲ關氏トシタリ。

十日市場ニ着キタルハ、二十七日ノ未明ナリキ、賊徒ハ、此時早クモ彌勒寺方面ニ逃ゲタル模様ナリシカバ、最早之レヨリ引返サシ、川村ノ關所ヲ過ギ、竹ノ下邊ニ着シタルハ、其夜九時頃ナリキ、アタリニ就テ之レヲ聞ケバ、慥カニ賊ノ潛ミ居ル模様ナリシカ、夜陰ノ事トテ、何處ヲ夫レト分ツ由モナク、無暗ニ發砲シツ、進ミタルニ、早クモ賊ハ、御殿場方面ニ逃ゲ往ケリ。

余等江戸勤番ヨリ、引續キ二三日ノ間、不眠不休ニテ働キタル結果、最早疲勞シテ如何トモ進ム能ハズ、適々小田原ヨリ郷兵來リ



シカバ、其レ等ニ追撃ノ事ヲ謀リ、茲ニ始テ休息ス、夜明ケテ昨夜以來如何ニ成リ行キシカラ見ンモノト、農馬ニ跨リテ出カケシニ、賊ハ既ニ吉原方面ニ落チテ、其内ノ二人ハ御領分堺ニテ、郷兵ヲ指揮シタル林盛安小山氏ノ打チ止ムル所トナリシトノ事ナリシカバ、稍ク安堵シテ御殿場ニ歸ヘリ、大晦日迄此所ニ滞在シテ歸城シ、御庭先キニテ、御酒ヲ頂戴シテ歸宅ス、此夜島村ノ火事アリ、疲勞此上モナクレド、時節柄普通ノ失火ト思ハズ、何等カノ事情アルニハアラズヤトノ懸念アリシ爲メ、直チニ馳セ出ヅ、越エテ戊辰正月二日ニハ集成館ノ失火アリ。之レヨリ後、脱藩志士等屢來リテ小田原藩ノ援ヲ乞フモノアリ、林昌之助人見勝太郎等又來リテ、頗リニ徳川氏ノ危急ヲ説キ、小田原城下諸説紛々トシテ乱レ、人心恟々タリ。

筆者曰ク、神原氏ノ談話、纏々トシテ盡キザレド、此後ノ談ハ、向井政敬氏ノ筆記ニ譲リ、重複ヲ避ケテ、茲ニハ之ヲ畧ス。

#### 古田元詮氏談話

中井範五郎、三雲爲一郎兩氏、豆相取締軍監トシテ、小田原へ出張シ、久保田甚四郎（本陣）方へ滞在ス。

土地不案内ノ爲メ、當藩ニ案内役一人ヲ附ケンコトヲ依頼シ來リ余即チ君命ヲ蒙リ、豆相軍監附屬ヲ命ゼラル、蓋是レヨリ先キニ官軍東下ノ折、余ハ矢倉澤ノ關所ニ勤務中、三雲爲一郎ノ一隊同所ヲ通過スルニ遇ヒ、折衝シタルコトアリ、此緣故ヲ以テ君命アリタルモノナラム、當本陣ニ詰メタルハ、余ノ外有浦目附役アリタルノミニテ、官軍方附屬トシテハ、三牧重太郎、小野木守三、



横山吉右衛門ノ三氏アリタリ。

折柄脱兵箱根ニ迫マルトノ報アリ、三雲爲一郎、三牧重太郎直チニ出張ス、此時ニ當リ藩論決セズ、箱根ニ對陣シテ砲火動カズ、三雲氏切ニ小田原藩士ニ説ク所アリ、稍クニシテ砲火始メテ開ク三雲氏直チニ本陣ニ歸リ、非常ニ満足シ、之レニテ小田原ノ疑念モ晴レタリト、大畧ヲ中井氏ニ報告ス。

中井氏モ共ニ喜ビ、之レヨリ直様應援ニ行カント言フ、三雲氏之レヲ制シ、何卒今一度拙者ヲト互ニ論ジ合ヒ、遂ニ中井範五郎氏三牧小野木ノ二氏ヲ連レ、夜中ヲモ物トモセズ出發シタリ、誰ゾ知ラン、之レゾ三氏ノ死出ノ旅路ナラントハ。

小田原藩、其夜ノ内ニ脱兵ト和ヲ結ビ、箱根ニ向ヒシ三氏ハ、爲メニ敢ナクモ、斬殺セラレタルナリ。

其翌日、當藩蜂屋重太夫、使者トシテ來リ、中井殿ハ中途ニテ過チアリタル由ナレバ、貴殿方(三雲氏等)ハ、直様立チ退カル、方宜シカラント言ヘバ、三雲氏色ヲナシテ蜂屋氏ヲ難詰スレ共、蜂屋氏敢テ他ヲ言ハズ、三雲氏等詮方ナク、一同退去ノ決心ヲナス、此時ニ當リ、酒匂川ハ連日ノ豪雨ニテ、渡過スルコトヲ得ズ依テ舟ニテ海路ヨリ逃レントス。

余即チ海邊ニ至リテ見レバ、舟ハアレモ水夫一人モナシ、稍ク名主ヲ呼ビ出シ、水夫ヲ集メシメテ、三雲氏等ヲ逃ス、此時官軍方ヨリ賞トシテ金三十圓ヲ賜フ。

既ニシテ、本陣ニ來リ見レバ、當藩士及脱兵等、本陣ヲ砲撃スル事急ナリ、余甚ダ迷ヒ、二三氏ヲ捕ヘテ其理由ヲ質セバ、發砲スルヲ可トスルモノアリ、亦否トスルモノアリ、何ガ何ヤラ、形勢



混沌タリ、兎角スル中、舟ハ無事海岸ヲ離レテ、退去ヲ全フスルコトヲ得タリ、此時余謂ヘラク、官軍ヲ打テトノ事ナラバ、余ハ之レヲ逃ガレシメシ罪、輕カラズト、仍テ直チニ目附所ニ至リ、身ノ處置ヲ迫リシカドモ、左右何レトモ決セズ、乃チ列座々敷ニ至リテ迫ル、列座々敷ニ於テハ、何等ノ罪ナキトノ事故、此由ヲ仰德隊長近藤一角ニ達ス。

其後仰德隊ト共ニ、箱根山崎戰ヲ經、間道ヨリ宮ノ下ニ至リ、奈良屋ニ泊スルコト兩三日、時ニ脱兵顯ハレ、之ヲ堂ヶ島ニ退ヒ詰メ、遂ニ近江屋ニ於テ射殺シ、首級ヲ改メ見レバ、先キ二十名アリタル脱兵ノ首級、九ツナルヲ認メ、諸所ヲ搜索シタレト、見當ラザリシ、後ニ聞ケバ、一人近江屋米櫃ノ中ニ隠レテ、身命ヲ全フシタル由ナリ。

朝廷ヨリ、問罪使ヲ遣ハサル、ヤ、三雲爲一郎氏モ、正使ノ一員トシテ入城ス、余褻キニ面識アルノ故ヲ以テ、選バレテ三雲氏ノ許ニ、再三使者トシテ赴キタレト、何等得ル所ナカリキ。

戸澤政恒氏談話

丁度私が十七歳ノ折デシタ、戰爭ダト云フノデ、城中ガ何トナクザツツイテ居リマシタ、ソレカラ山崎ヘト向ヒマシタ、何分其頃ノコトデ、隊伍ヲチャント組ンデ、行クデモナク、思ヒ々々ニ出掛ケマシタ、服装等モ不揃ノモノデシタ、私ハ小倉袴ニ筒袖ノ打割キ羽織デ、鐵砲ヲ一挺持ツテ行キマシタ、山崎ノ方ヘ着クト、モウドンドン砲撃シテ居リマス、味方モ敵モ、其所此所トナク散ラバツテ、味方ノ人々ハ、田ヤ畑ノ中或ハ溝ノ中ニ隠レテ、發砲シテ居リマシタ、私ハソノ今丁度入生田ノ電車停留所ノ近傍デ、鈴



木久太郎氏ニ遇ヒマシタ、此人ハ、タシカ大砲方ダト思ヒマス、其人ガ、戸澤一所ニ來イト、二人デ溝ノ中ニ隠レテ、盛ニ發砲シテ居リマシタ、所ガ急ニ鈴木氏ガ斃レマシタノデ、驚イテ前方ヲ見ルト、今マデ氣モ付カナカッタ小山ノ上ニ、敵ガ銃口ヲ揃ヘテ此方ヲ窺ツテ居ルノデシタ、ヤ、ソノ時ノ可恐サト云ツタラ、實ニ御話ニモナラナイ程デ、一生懸命デ、甕ノ中ニ隠レテ、息ヲ殺シテ居リマシタ。

ソレカラ、箱根ヘト行キマシタ、箱根ノ時ハ、チャント隊ヲ組ンデ居リマシタ、私等ノ組ハ四十人バカリデ、隊長ハ孕石帶刀氏デシタ、町外レノ蘆川マデ行タト、熱海街道ヘト、逃ゲテシマツタ敵ノ内デ、逃ゲ遅レタモノヲ、四人見付ケマシテ、ソレツト云フノデ、同時ニ皆ガ發砲シマシタガ、中々中ラナイモノデ、四人ノ

内二人ハ仕留メマシタガ、二人ハ逃ガシテシマヒマシタ、此逃ゲタ人ガ、吉田周作ト云フ人ト、逸見靜馬ト云フ人ダツタソウデスソレカラ暫クスルト、又四人ニ出遇ヒマシタ、之レハ四人共討取リマシタ、此戦争カラ歸ツテ、殿様カラ二分賜ハリマシタ。

早川莊次郎氏談話

私ガ十五歳ノ時デシタ、五月ノ廿日デシタガ、布令ガアリマシテ夫レゾレ、固メヲ付ケルコトニナリマシタ。

廿一日ニ、上方口（今ノ光園寺ノ向側）ノ固メハ、侍ガ四人、其下ガ四人デシタ、一番ノ頭分ガ山田龍兵衛デ、右手ノ正面ニ控ヘ左手ニハ小泉彦藏ガ控ヘ、残りノ二人ハ、鐵砲デ見附ヲ楯ニ、前後ノ見張リヲシテ居リマシタ、ソレカラ、私ノ方ガ四人デ、私ノ外ニ伊藤包術、長谷川小兵衛、尾關徳藏ガ居リマシタ、丁度當今



ノ午前十時頃デシタガ、一挺ノ早鷲ガヤツテ來マシタ、早速法ニ  
從ツテ調べルト、疑ハシイ點ガ多カツタノデ、尙調べヲ續ケ居ル  
ト、其隙ヲ見テ、山田龍兵衛ノ側ニ置イタ大刀ヲ奪バホフトシタ  
ノデ、長谷川小兵衛ガ、六尺デ腦天ヲ打ツト同時ニ、小泉彦藏ガ  
右ノ肩先ヨリ切り付ケ、續イテ山田龍兵衛ガ首ヲ刎ネテシマヒマ  
シタ、供ニ來タ一人ノ男モ、共ニ其所デ首ヲ刎ネル所デシタガ、  
全ク山男ノ様ナ、ツマラヌ人間デアツタノデ、直グ私ガ早鷲ヲカ  
ケマシタ、今考ヘテモ可笑シイノハ、其時ノ駕夫ノ恰好等デ、實  
ニドウモ話ニナラム位デ、溝ノ中ヘ入ツテガタガタ慄ヘテ居リマ  
シタ、後デ聞クト、殺サレタ人等ハ、湯本ノ早雲寺近傍ニ夜ヲ明  
カシテ、衣類ヤ何カハ、皆借り物デ、刀ガ一本駕ノ屋根ニ、睨リ  
結ビ付ケテアリマシタガ、之レトテモ寺男カ何カノ帶ス位ノモノ

デシタ。

ソウコウシテ居ル内ニ、伊庭八郎ノ一隊ガ、首ヲ七八ツ提ゲテ、  
板橋ノ方面カラ、葵ノ旗ヲ押シ立ツテ、乗り込ンデ來ルト云フノ  
デ、今見附ガ汚レテ居ルカラ、少シ待テ貰ヒタイト申シ込ムデ、  
其内ニ荒久ニ居タ番太ニ、死骸ノ始末ヲ付ケサシテ、伊庭八郎ノ  
一隊ヲ迎ヘマシタ。

スルト伊庭八郎ガ、最前斬ツタ首ヲ見タイト言フノデ、首ヲ見セ  
ルト、之レハ吉井顯藏ト云フモノニ違ヒナイト云フ事デ、始メテ  
殺サレタ人ノ身分ガ分リマシタ。

吉村先央氏覺書（此書ハ關重忠氏ニ宛テタル書面中ヨリ摘録  
ス）

私共ノ隊ハ三十六人組ニシテ、隊長ハ相馬清四郎氏、分隊長ハ村



田平次郎氏ナリ、五月二十六日、朝早ク水ノ尾方面ニ向ヒ、ソレヨリ風祭入生田等裏手山ノ頂上ヲ進ミ、入生田村駒ノ爪ノ所ニ下リ、海道ヲ進マントス、コ、ニ敵ノ斥候居リテ、彼方ヨリ直チニ發銃ス、相馬清四郎組ハ、第一先鋒ナル故ニ、海道ニ下ル以上ハ直チニ敵兵ニ衝突スベシトハ、隊長豫テノ覺悟ナルヲ以テ、山手ニ依リ、一齊ニ射撃ス、二人ノ逃出者ヲ見ル、之ヲ追撃シツ、山崎村人家ヨリ、約二町バカリノ所迄進ミタリシニ、一人ハ負傷シテ仆レ居リ、一人ハ逃延ビタリ、見張ノ爲メコ、迄出張シ居リシハ、僅カニ此二人ト察セラル、負傷者ノ首ヲ斬リテ、小田原ニ送ル（田村銀八郎之ヲ斬ル）、海道ヲ進ム本隊、銃聲ヲ聞クヨリ、駆足シテ來リ、間モナク第二第三ノ後續隊進軍シ來リシモ、敵ハ山崎正面ノ上リ坂ノ上ニ、土俵ヲ四五尺ノ高サニ積累ネ、山上ノ

木立ノ中、又ハ民家ヨリ、人體ヲ隠シテ發銃シ、我ハ右手ノ山下ニ據リ、又ハ左手ノ狹ク深キ小川ニ伏シテ應戰シ、漸々進マントスルモ、未ダ好時機ヲ見出ダサザリシモノカ、進軍ノ命令ナシ、四時頃、長州軍ノ一隊進ミ來リ、其隊長海道中ニテ負傷シ、後部ニ送ラル、此時長軍ヨリ拔刀突撃ノ命ヲ傳ヘ、全部隊突進攻撃、山崎ノ入口ニテ、二三ノ敵ヲ斬殺シ、直チニ土俵ノ前ヘト進ム、此戦ニ敵ノ手首ヲ切り落シタル者アリ、（此時誰ノヤラ姓名ヲ知リシ者ナシ、コレ高橋藤太郎氏ノ斬リシナリト云フ、同氏ハ同時顔面ニ銃丸ヲ受ク、二間以上モ離レタル海道中ニ仆レ居レリ）。敵ハ此進撃ニ由リテ、後方ニ退却シ、我ハ之ヲ追撃シツ、早雲寺ノ藪下迄行き、進軍ヲ止メラレタリ、晚景三枚橋側ニ、三人方角ニ迷ヒテ出デ來リシモノアリ、一人ハ田ノ中ニ銃殺シ、一人ハ原



三五右衛門氏、老體ニモ拘ハズ、自ラ名乗リテ斬殺セリ、他ノ一人ハ橋前ニ斬殺セリ、敵ハ湯本臺ノ茶屋ニ放火シテ退却シ、私共ノ隊ハ、白地藏ノ前ニ備ヘ、兵燹ヲ前ニ見ツ、夜警シ、二十七日未明ヨリ隊長ニ引卒セラレ、塔ノ澤通り本隊ニ會スベク進ミ、途中敵ニ出會セザリシ、(湯場道ヲ進ム後續隊ハ、堂ヶ島ノ近江屋店頭ニ敵兵ヲ發見シ、之ヲ擊殺セリ)、箱根宿ノ敵ハ、全部日金道ヨリ熱海ニ下レリ、山中ニ居リシ敵兵ハ、之ヲ知ラズシテ、正午頃宿ノ西端ニ上リ來リ、北海道ヲ進ミシ本隊ト出遇ヒ、擊破セラレテ、八九名戰死、二名捕ヘラル、私共ノ隊ハ、現場ノ有様ヲ目撃シ、進ンデ日金ノ堂ニ居殘リシ負傷者、二名ヲ得テ、本宿ニ引舉ゲ、コ、ニ戰ヲ終了セリ、私共卒族一同ハ、戦後功勞トシテ金五兩ヅ、ヲ頂ケリ。(其他畧ス)

木野村政榮氏談話 (木野村氏ハ本年八十歳、當時脱走ノ捕虜トナリ、苦辛セラレシ人ナリ)

慶應四戊辰五月八日、伊豆國臺場關所詰メ被仰付、岩崎市右衛門小組頭トシテ、拙者外七人出發ス、同二十五日三島明神前ノ關門詰メノ片、遊撃隊々長戸梨喜一郎、小田原藩加藤市太夫ノ次男加藤音哉等、先人トナリ、三島關門ヲ破リテ、箱根ニ向フ、其時小田原ハ脱走ト相連和セリトノ報知來リシヲ以テ、守リヲ引揚ゲ、廿六日湯本臺ノ茶屋迄歸リ來リタル片、又小田原ハ官軍附キトナリタル爲メ、自分等一行ハ、爲メニ脱走ノ捕虜トナリ、武器携帯ノ儘、隊長戸梨喜一郎ノ差圖ニテ、畑宿ヨリ瀧坂ヲ登リ、蘆ノ湯ニテ一泊、翌二十七日箱根宿本陣天野方へ送ラレ、直チニ山中關門詰メヲ命ゼラル、其時久下又六、小野豹二郎ノ二君ハ、途中ニ



於テ自裁セリ、同廿八日小田原ヨリノ命ニ依リテ、引揚ヲ命ゼラレ、直チニ脱走追跡ノ命ヲ受ケ、湯ヶ原ニ下リ、門川村近傍ヲ巡視シタルモ、脱走ノ影無之ニ付、直チニ門川村ヨリ乗船、六ツ時(當今ノ六時)早川村海岸ニ着シ、西海子ノ自宅ニ歸ル、同二十九日武器携帯ノ儘、城中ニ出頭シ、武器ヲ上納シテ、歸宅後謹慎申付ラレ、翌日ヨリ正門ノ片扉ヲ<sub>カミヤカキ</sub>切ニシ、謹慎(髮月代外出ヲ禁ズ)スルヲ九月二十七日マデ、翌二十八日始メテ謹慎御免ト成ル。

#### 田代豊次郎氏談

筆者曰戊辰殉難者中横井春江氏ノ事ニ就テハ、風説區々ニシテ、或ハ狂セリト云ヒ、或ハ否ラズト云ヒ、眞偽判明セズ遺憾ニ思ヒタリシニ、幸ニモ當時相馬組中ニアリテ、先頭ニ奮戦セラレタル、田代氏ヨリ其真相ヲ聞クヲ得タレバ

#### 左ニ摘録シテ參考ニ資ス

横井春江氏ハ、其當時近習役ヲ勤メ、山崎戦争ニ際シテ軍目付ヲ命ゼラレ、鵜澤要人等ト共ニ彈丸雨飛ノ間ヲ事トモセズ、諸軍ノ間ヲ往復シ居ラレタルガ、當時松下舍人ヲ隊長トセル一隊(約四十人)アリ、松下氏傷クニ及ンデ之ニ代リテ其隊長トナル、勇敢ナル氏ハ抜刀シテ部下ヲ指揮シ居タリシガ、偶部下入江某所用ノ爲メ戦線ヲ退キタルヲ見テ、怯懦ノ爲メ逃走セントスルモノナリト誤認シ、叱咤之ニ一刀ヲ加ヘタリ、然ルニ事實ハ全ク之ニ反セルヲ以テ、部下一同大ニ憤激シ、隊長ノ不法ヲ鳴ラシ不穩ノ狀勢アリ、因ツテ戦畢ルヲ俟ツテ自宅ニ歸リ、責ヲ引イテ自盡セルモノニテ、決シテ發狂等ナセルモノニアラズ云々。

#### 編者附記



余曾テ職ヲ高知縣ニ奉ズ、當時長岡郡視學ニ宇賀行三ト云ヘル人アリ、時々相會シテ共ニ教育ノ事ヲ談ズ、一日談戊辰ノ役ニ及ブ豈圖ランヤ、氏ハ吉井顯藏ノ二男ニシテ、家兄某氏ハ、實ニ山田小泉二氏ノ首ヲ斬リシモノナラントハ、當時氏ハ幼ニシテ、慈父ノ顔モ知ラザレドモ、談ハ能ク家族ヨリ聞知シテ、記憶セラレタリ、其談ニ曰ク、吉井氏ノ害ニ遭フヤ、兄氏ハ奮激ノ餘、敵討ヲ願出セシモ、朝廷之ヲ許可セズシテ、更ニ斬首ノ役ヲ命ズ、名ヲ避ケ實ヲ取ラシメシナリ、當時兄氏尙ホ弱冠ナリシヲ以テ、親戚附添上京シ、愈刑場ニ臨ムヤ、先ヅ山田氏ヲ斬ル、手腕猶熱セズシテ一刀其頭ヲ落ス能ハズ、數回ニシテ稍ク之ヲ斷ツ、次デ小泉ニ及ブヤ、小泉之ヲ見テ、兄氏ニ謂テ曰ク、「坊サレ上手ニ切ツテ下サイ」ト、余モ亦幼時父老ニ聞キシ所ヲ以テ氏ニ語ル、氏感慨鳴

咽、親子ノ情ヲ極ム、余亦爲ニ同情ノ涙ヲ禁ズル能ハザリシ、其時同氏尙ホ語ヲ繼イデ曰ク、維新後新聞紙ノ發行隆盛トナルヤ、某新聞ノ如キ、頻リニ維新當時ノ事跡ヲ掲ゲ、吉井氏戰死ノ事ヲモ載セントシテ、資料ヲ氏ノ實家ニ需ム、然レモ實家謂ラク、維新當時ノ事、今日敢テ其正否ヲ争フヲ要セズ、况ンヤ先方亦子孫アルベキニ、其衷情ヲモ察セザル可ラズトテ、其掲載ヲ謝絶セリト山田氏ノ後ヲ承クルモノハ、山田克敬ナリ、余一日克敬ニ語ルニ此事ヲ以テス、克敬亦感ニ堪ヘザルモノ、如ク、頗ル同氏ノ厚意ヲ諒トセリ。

藩儒村山葆、鈴ヶ森ヲ過ギ、山田小泉二氏ヲ吊フノ詩アリ、左ニ録ス。

過鈴森吊小泉山田二氏

枕山



同死國難名共香、一雙義氣壓三湘、忠魂空化鈴森草、千歲月明  
斷頭場。

五 戊辰殉難者五十年祭狀況

戊辰殉難者五十年祭ハ、關海軍機關少將、神原小田原紡織會社重  
役、加藤元小田原町長、岩田現小田原町長等發起ノ下ニ、有志ニ  
向テ、左ノ紹介狀ヲ發シ、協議ノ後、左ノ趣意書ヲ作りテ、廣ク  
義捐金ヲ募集セリ。

肅啓、時下秋冷之候、益御清榮奉賀候、陳者、戊辰戰役アリ  
テヨリ、星霜茲ニ五十年、往時ヲ追想シ、涙又新ナルモノ有  
之候、就而ハ、舊小田原藩士、他藩士ノ別ナク、該戰役ニ、  
當地ニ於テ陣歿セラレタル志士ノ爲、五十年祭ヲ營ミ、聊カ  
英靈ヲ慰メ度、種々御協議ヲ遂ケ度儀有之候ニ付、來ル十三

日午後七時ヨリ、小田原町役場マデ、御來臨相成度、此段得  
貴意候敬具。

大正六年十一月十一日

關 重 忠  
加 藤 定 通  
岩 田 尙 恒

趣 意 書

戊辰ノ革命ハ、我邦ノ一大政變ニシテ、當時憂國ノ志士、四方ニ  
起リ、天下騷擾ヲ極メタル事實ハ、今尙ホ耳ニ新ナル次第ニ有之  
候、我小田原藩人モ、之レガ爲ニ屍ヲ原野ニ曝セシモノ、幾十百  
人ノ多キニ及ビ、當時ヲ追想致候時ハ、轉タ感慨無量ニ有之候、  
曩ニ二十七年回弔祭ニ當リ、他藩殉難ノ士モ、等シク憂國ノ至誠  
ヨリ出デタルヲ思ヒ、共ニ合祭ヲ舉タル例ニ倣ヒ、本年恰モ五十



年ニ相當致候間、諸君ノ御同情ヲ得テ、一片追念ノ禮ヲ舉ケ、大ニ志士ノ英靈ヲ慰メ度、生等餘生ヲ保チ、一層追懷ノ情切ナルモノ有之候間、卒先此舉ヲ企テ候ニ付、御贊助ヲ得、多少共御喜捨相願度、懇請ノ至ニ堪ヘス候。

大正六年十一月

戊辰戰役殉難者五十年祭發起人

關 重 忠  
神 原 富 文  
加 藤 定 通  
岩 田 尙 恒

趣意書既ニ發スルヤ、忽チ各方面ノ協賛ヲ得、寄附金集ル者千有餘圓、乃チ大正六年十二月二日ヲ以テ、祭地ヲ小峰公園ニトシ、

神佛合同ヲ以テ莊嚴ニ其式典ヲ執行セリ、當時豆相新聞委シク其狀況ヲ報道セリ、今左ニ之ヲ抄録ス。

豆相新聞記事抄録 (豆相新聞第三千廿三號)  
(大正六年十二月四日)

### ◎ 戊辰殉難者五十年祭

△追想回顧ノ情ニ滿チテ實ニ未前ノ盛儀ヲ極ム

王政維新ニ於ケル戊辰戰役ニ際シ舊小田原領箱根山崎及ビ附近ニ於テ戰歿シタル小田原藩及他藩士ノ五十年回忌追吊法要ハ既報ノ如ク關海軍機關少將、神原小田原紡織會社重役、加藤元小田原町長、岩田現小田原町長四氏發起ノ許ニ舊藩主並ニ藩士其他町內有志者ノ贊助ヲ得再昨二日午前十一時ヨリ當町小峰公園ニ於テ神佛合同ノ式ヲ以テ莊嚴ノ裡ニ執行セラレタリ、地ヤ小田原古城ノ舊



跡ニシテ三方段々タル丘岡ニ圍マレ、松樹篠篁遠ク梅園ヲ繞ラシ  
テ自然ノ仙境ヲ爲ス、式場ハ園ノ中央西端部ニ設ケラル、前日來  
當該幹事諸氏ノ熱心ナル奔走ヲ以テ諸般ノ設備ヲ了シ、二日午前  
十時舉式ノ豫定ナリシモ、拂曉來ノ降雨ハ當日ニ至リ遽ニ設備ノ  
豫定ヲ變更スルノ止ムナキニ至リ、一時間遲延ノ後同十一時式ヲ  
舉グルノ運ビニ達セリ、即チ朝來ノ雨ハ殉難戰役者ノ忠魂義魄ヲ  
弔フガ如ク、而シテ其式ヲ舉グルニ先チ、潜々タル降雨ハ飄ミテ  
空ハ一碧拭フガ如ク、洋光熙々トシテ場外ノ楓葉色愈々丹ク、恰  
モ殉難諸氏ガ奉公義烈ノ至誠ヲ飾ルガ如ク、人ヲシテ感慨一層ノ  
深キヲ致サシメタリ、午前十一時振鈴ト共ニ順次一同着席スルヤ  
齋主草山二宮神社神官祓ノ式ヲ行ヒ、次テ囀曉タル奏樂ノ裡ニ降  
神、献饌ノ式アリ、次テ草山齋主左ノ祝詞ヲ奏上ス。

祝詞

此乃所乎伊豆乃磐境止掃清米弓招奉里座奉留岩瀨大江之進大人  
乎始米弓六十餘七人乃益荒健夫等乃御靈乃前爾齋主報德二宮神  
社々司草山惇造畏美畏美毛白左久阿波禮汝命等乃戊辰乃役爾家  
乎忘禮身毛棚知良爾勤美勞支給比志誠心乃程波當時乃人等與利  
言繼可比語繼可比弓世乃人皆乃克久知禮留事奈禮婆今更爾拙支  
言乃葉以弓稱白左牟波仲々爾愚奈留信志斯久弓今年波其身退里  
坐介留與里五十年爾奈毛成奴禮婆汝命等乃御功乎仰支奉里慕奉  
留真心篇支人等相謀里相談良比弓今日乃生日乃足日爾御祭嚴志  
久仕奉良牟止御食御酒海川山野乃多明物乎八取乃机代爾八盛備  
弓捧奉良久乎箱根乃山乃彌高爾小編綾乃海乃彌廣爾開食志宇豆  
那比給反止畏美畏美毛白須。



大正六年十二月二日

右終ツテ奏樂裡ニ大島陸軍大將玉串ヲ捧ゲ、次デ遺族並ニ參列者順次玉串ヲ獻上シ、夫レヨリ昇神ノ式アリ、茲ニ於テ式全ク終ルヤ一同順次退席ス、午後零時廿分引續キ佛式ニ移リ、一同着席スルヤ獻供、點茶、靈膳ノ式ハ大久寺、光圓寺、善光寺ノ三住職ニ依リテ奏樂ノ裡ニ行ハレ、次デ三住職ノ焼香アリテ導師席ニ復席スルヤ、小田原町各宗寺院十八ヶ寺及ビ遺骨關係寺院十一ヶ寺ノ各僧侶整列經文ヲ誦シ終ルヤ寺院團ヲ代表シテ當町蓮上院住職高木快雅師左ノ追悼文ヲ朗讀ス。

追悼文

維時大正六年十二月二日小田原ノ有志主催トシテ戊辰戰役殉難者五十年忌追悼會ヲ修スルニ當リ恭シク香花蔬羞ノ微供禮典ヲ

辨備シ報地莊嚴ノ法要勤修シテ志士ノ聖靈ヲ祭リ其英魂ヲ弔フ伏シテ惟ミルニ皇國今日ノ盛運素ヨリ 陛下ノ御威稜ニ依ルト雖モ遡リテ半世期前明治戊辰戰役身ヲ鋒鏑ニ委シ修羅場ノ煙ト化セシモノヲ回想スルキハ轉タ悽愴ニ堪ヘザルモノアリ箱根山崎ニ於ケル小田原藩士ノ節ニ死スルモノ十六名官軍十八名幕臣三十四名都合六十八名ノ烈士ハ當時ノ犧牲トナル寔ニ痛惜ノ情ニ堪ヘザルナリ然レモ生死ハ固ト一如ナリ只其所ヲ得ンコトヲ貴ブ志士ハ勤王ト佐幕ト其所ヲ異ニスト雖モ均シク君恩ニ奉答シ私ヲ忘レテ公ニ奉ジ身ヲ捐テ國ニ報ヒ死シテ其所ヲ得武夫ノ本領ヲ完フセシモノト云フベシ茲ニ一味平等自他不二ノ極旨ニ因リ大乘普門ノ妙典ヲ讀誦シ英靈得脫ノ資料ニ供ス曼荼界會ノ諸尊ハ微妙莊嚴ノ笑ヲ含ミ解脱勝妙ノ覺殿ヲ開イテ諸士ノ入證ヲ



竣ツアラン願フ處ハ此功德ヲ回シテ三明六通通シク菩提ヲ證シ  
七覺八正共ニ涅槃ニ至リ帝道鞏固ニシテ文明ノ化遠ク八紘ニ及  
ボシ法運隆昌ニシテ佛日ノ光遐カニ龍華ノ曉ニ輝カソフヲ尙饗  
ケヨ

大正六年十二月二日

小田原寺院團

代表 高木快雅敬白

續ヒテ左記諸氏靈前ニ進ミ左ノ祭文ヲ朗讀ス

祭文

維レ時大正六年十二月二日清酌庶羞ノ奠ヲ以テ戊辰ノ役ニ我足  
柄箱根ニ於テ陣歿セル諸士ノ靈ヲ祭ル惟フニ鳥兔勿々茲ニ五十  
年回顧感慨ニ堪ヘズ依テ有志相謀リ本日ヲトシテ諸士ノ英靈ヲ

祭ル尙クハ享ケヨ

有志總代正六位勳六等 神原富文

祭文

戰雲山岳ヲ鎮シ雷霆地ニ迸リ風光明媚ノ勝地化シテ修羅ノ巷ト  
ナル是我戊辰戰役ノ光景ニアラズヤ回顧スルニ既ニ五十年當時  
殉難陣歿ノ士或ハ敵或ハ味方向フ所相異リト雖各忠ヲ其事フル  
所ニ盡スニ至ツテハ豈何ゾ吟域ヲ其間ニ措クベケンヤ乃チ本日  
ヲトシテ清酌庶羞ノ奠ヲ擧グ今ヤ世界動亂列強戈ヲ取ツテ相立  
ツニ當リテ皇國ノ人心一和能其勇武ヲ煥發スル所以ノモノ固ヨ  
リ皇威ノ然ラシムル所ナリト雖モ亦諸士奉公ノ義烈深ク人心ヲ  
鼓舞激勵スルモノアルニ因ラズンバアラズ余輩幹事聊幹旋敢テ  
犬馬ヲ勞ス亦惟英靈ヲ泉下ニ慰センガ爲ノミ尙クハ饗ケヨ。



大正六年十二月二日

幹事總代 植松彦三

祭文

大正六年十二月二日我舊小田原藩士戊辰戰役殉難諸士ノ五十年祭ヲ舉ケラル

願レハ往事渺茫トシテ殆ンド夢ノ如ク當時老生モ亦藩士ノ末班ヲ穢シ此間ニ往來ス

殉難ノ諸士ハ何レモ親交厚ク日夕談笑ヲ交ヘシ師友ナリ殊ニ山田龍兵衛君ハ吾砲術柔術ノ恩師ニシテ薰陶愛撫恰モ家人ノ如キ寵遇ヲ受クシハ今尙忘ル、能ハサル處片切左仲君ハ刎頸ノ交ヲ結テ最親交深カリシナリ

想テ茲ニ至レハ感慨無量更ニ哀愁ヲ新ニセリ老生區々ノ餘命ヲ

保チ八十餘歳ノ老軀ヲ提ケテ此盛典ニ列ス涙無ナカラント欲スルモ能ハサルナリ蕪詞一片諸士ノ靈前ニ呈ス幸ニ微衷ヲ稟ケヨ

大正六年十二月二日

手島兎喜二

祭文

維レ時大正六年十二月二日有志者相諮リ謹ムテ清酌庶羞ノ典ヲ具シ爰ニ舊小田原藩士及ヒ他藩士ニシテ舊大久保家領内ニ於テ明治維新ノ難ニ殉シタル者ノ爲メニ追祭ノ儀ヲ舉ク恭シク惟ミルニ諸士ハ國家多難ノ秋ニ丁リ挺然トシテ義ニ就キ奮然トシテ命ヲ殞ツ或ハ以テ朝廷ノ爲メニ盡シ或ハ以テ主家ノ爲メニ報ス其ノ國家ニ效シ社稷ニ殉スルニ於テ大小ノ別アリ内外ノ分アリト雖モ私ヲ去リ公ニ從ヒ身ヲ鴻毛ノ輕キニ比シ義ヲ泰山ノ重キ



ニ等フシ苟モ萬死ニ入ツテ一生ヲ希ハサルノ精神氣魄ニ至ツテ  
一ナリ精忠大節誠ニ以テ千古ニ炳耀シ後代ニ範ヲ遺スニ足ル  
今ヤ我帝國ハ益ス隆昌ニシテ威四隣ヲ壓シ德八紘ニ洽ネシ而シ  
テ舊主家亦愈ヨ繁榮ニシ社稷ノ長久鞏固ナルヲ見ル諸士ノ力與  
ツテ力アリ諸士ノ志成レリト謂フヘキナリ惟タ恨ム九泉途遠ク  
幽明境ヲ異ニス諸士ヲシテ目之レヲ睹耳之レヲ聽クコトヲ得セ  
シメサルヲ節偶マ初冬ニ當リ疾風枯葉ヲ捲キ天地壯烈而シテ寒  
雨ヲ衝テ愈ヨ紅ナル楓葉ハ以テ諸士ノ赤心ニ喻フヘシ嚴霜ニ傲  
テ益ス芳シキ菊花ハ以テ諸士ノ高節ニ比スヘシ不肖廣助亦舊藩  
士ノ末ニ列リ幸ニ此盛儀ニ與ルヲ得俯仰感慨ノ情ニ堪ヘス乃チ  
誠ヲ披ラキ辭ヲ裁シ以テ諸士ノ靈ニ告ク尙クハ英魂髣髴トシテ  
夫レ來リ饗ケヨ

大正六年十二月二日

豆相新聞社長 星崎廣助

右終ツテ參列者ノ燒香ニ移リ有志總代神原富文、大久保子爵代拜  
(家令吉野直美)遺族岩瀬正勝、鈴木清臣、山田克敬、久下光廣、  
渡邊壽治、片切氏代理牧野好靜、舊三州田原藩士遊擊隊生存者小  
柳津要人、勅任官海軍機關少將關重忠、陸軍少將木全多見、海軍  
少將關重孝、參列陸海軍將校島陸軍大佐、本郡聯合軍人分會長川  
添陸軍中佐、菊池本郡長、石黒小田原警察署長、岩田町長、加藤  
小田原軍人分會長、阿部小田原中學校長、渡邊小田原高等女學校  
長、齋藤第一、張第二、久野第三各小田原小學校長等諸氏ノ燒香  
アリテ式ノ了リタルハ午後一時半ナリキ、此日小田原軍人分會員  
及ヒ小田原中學校、小田原高等女學校、第一、第二、第三小田原



小學校生徒ノ參拜アリ、又佛式ニ先チ前記二十九ヶ寺僧侶ノ練供養アリテ頗ル盛儀ヲ極メタリ、當日參列者ノ重ナルハ前記諸氏ノ外加藤定通、吉田縣會副議長、椎野縣會議員、益田小田原銀行頭取、今井同行綠町支店長、内田同行幸町支店長、神保東海新報社長、別府安之助等ノ諸氏及ヒ町會議員、舊藩士、賛助員關係者等無慮數百名ニシテ稀ニ見ルノ盛況ヲ極メタリ、午後一時ヨリ餘興ノ擊劍、柔道、神樂、子供手踊ノ催シアリ見物人潮ノ如ク寄セ來リテ流石ニ廣キ同公園内モ人ヲ以テ埋マルノ雜沓ヲ極メ朝來打上ル煙火ハ大イニ景氣ヲ添ヘ夜ニ入ルヤ各種各様ノ煙火ハ爆然トシテ闇ヲ縫フテ中天ニ轟キ甚ダ盛觀ヲ極メタリ。

六 戊辰殉難者姓名

戊辰戰役殉難合祭者調 (大正六年十二月二日五十年祭)

舊藩名	戰死場所	月日	埋葬地	氏名
小田原	小田原	六月十日	菩提寺三乘寺	岩瀬大江之進
全	江戸	十月十日	全三乘寺	渡邊了叟
全	山崎	五月廿六日	桃源寺	片桐左仲
全	全		鈴木久太郎	鈴木久太郎
全	全	五月廿六日	菩提寺永久寺	高橋藤太郎
全	湯本	五月廿七日	三乘寺	久下佐久兵衛
全	全	五月廿六日	新光明寺	高井林平
全	箱根笹原	五月廿六日	桃源寺	小野豹二郎
全	江戸鈴ヶ森	九月廿七日	光圓寺	山田龍兵衛
全	全	九月廿七日	桃源寺	小泉彦藏



幕臣箱根	對州寺町	全	全	薩州甲州境	全	全	全	松下	佐土原	全	全
五月廿六日	明治元年 五月廿四日	全	全	慶應二年 三月廿八日						全	全
首級 胴體 大蓮寺 常泉寺	高長寺	全	全	大乘寺							
前田條三郎	山田米作	坂本嘉三郎	早川均	栗林芳五郎	秋津金左衛門	竹内春之助	吉田萬藏	片山清五郎	御牧重太郎	加納喜三郎	小池安五郎

全	松下	荻野山中	大村	土州	因州	全	全	全	全	全	全	小田原函館
全	全	全	全	全	五月廿一日	全	全	五月廿六日	五月廿八日	五月廿六日		山崎
					板橋地藏堂	蓮上院		全	三乘寺	養詫寺		
田邊健三郎	橫田長三郎	小野木守三	山田慎藏	吉井顯藏	中井範五郎	齋藤太兵衛	大西藤次郎	小川小右衛門	橫井春江	石川連治	渡邊源四郎	



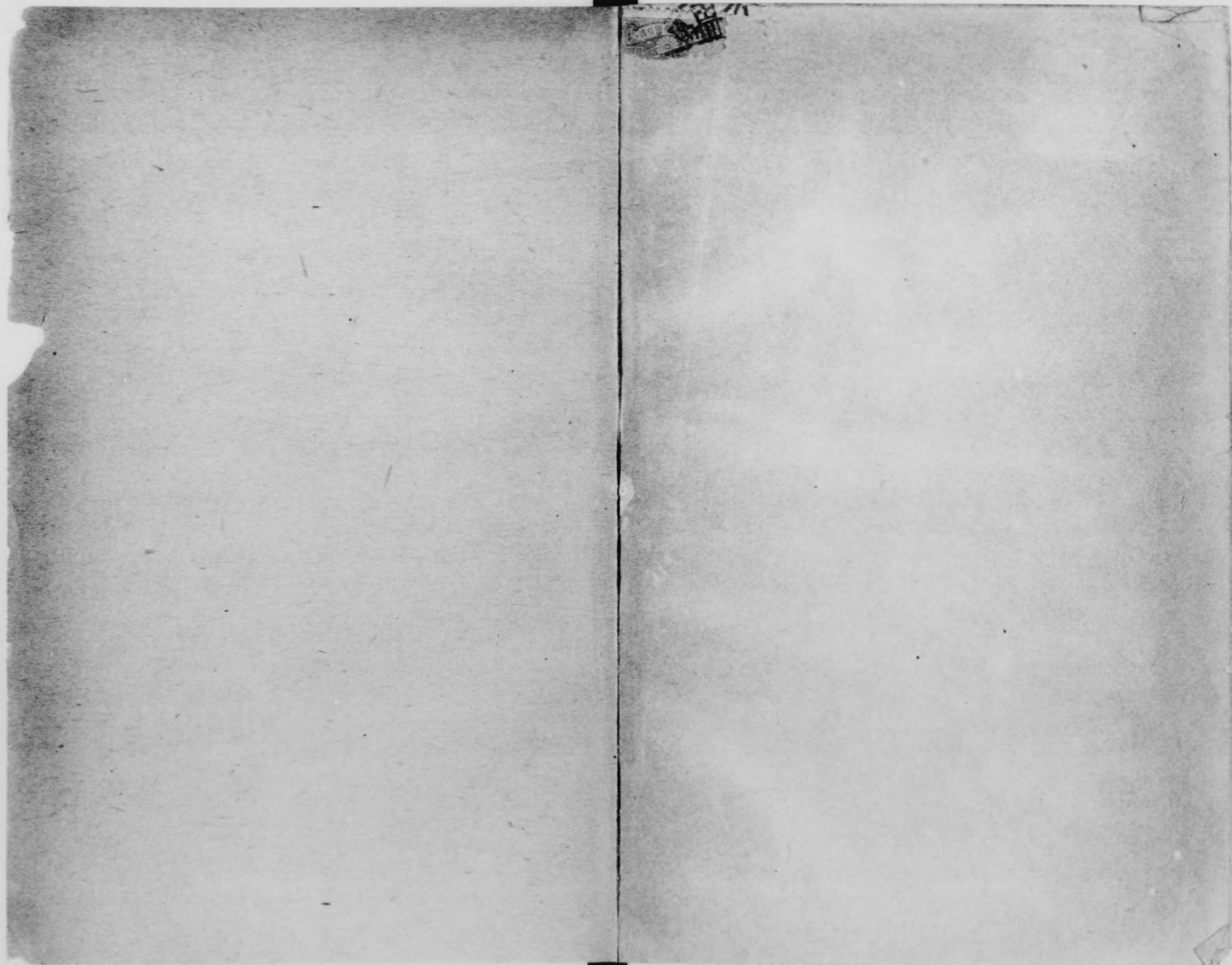
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
高橋萬吉	智作太郎	須藤靜馬	竹内利兵衛	高橋種助	澁谷兼吉	秋子松五郎	佐久間德藏	高橋德太郎	須藤彌八郎	渡立半藏	戸塚辰五郎

幕臣箱根	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
五月廿六日	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
首級 大蓮寺 常泉寺	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
堀屋良助	由井藤右衛門	市川元之丞	小林隼之助	竹本幸之助	松田早之助	小笠原正七郎	關岡金太郎	關敬次郎	太田桃吉	内藤鏡吉	楢石作之丞
本箱根 還寺 以下	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
以下遊撃隊	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全











373  
279

8.4.15



終

